2023年6月25日 佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書4章5〜7節
説教題：主の愛を信じて

カナダで開拓伝道を始めた頃、教会会議の伝道委員会の方々と食事をしながら交わったことがありました。1人の高齢の兄弟が自分のことを話してくれました。彼は、戦後すぐに旧ソ連からカナダに移住して来た人でしたが、旧ソ連では、メノナイトの人達は大変な迫害を経験しました。彼は言いました。「ある日、コミュニストが家にやって来て、私の父を連れ去った。父は2度と帰って来なかった」。しかし彼は、その辛い話をにこやかな表情で話すのです。私はその人の中に「もう何があっても揺れない、『樫の木のような信仰』」を強烈に感じたのを覚えています。

私達の信仰生活の目的(意義)というのは、「神様との関係をどう作って行くのか、それに尽きる」と言っても良いのではないかと思います。「神様との本当の良い関係を作る」、今日の聖書箇所も、そのための大切なポイントを教えてくれる箇所です。ご一緒に学んで行きましょう。

今朝の箇所は「荒野の誘惑」の2回目の話になります。イエス様は、バプテスマのヨハネから洗礼を受けられましたが、その後すぐ「悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれ」(1)ました。この荒野の誘惑はイエス様にとって、神の子として、救い主として、どのようにその公生涯を生き、どのような「救い」を人々に与えるのか、その方向性が確立される大切なテストの時でした。悪魔が最初に仕掛けて来た誘惑は、40日40夜の断食をして、空腹でたまらないイエス様に「これらの石がパンになるように命じたらどうか」というものでした。「人々にパンを与える、人々の当面の飢えを満たす、それが人間救済の道ではないか、あなたはそのような救い主であればよいではないか」という誘いでした。それに対してイエスは「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」(4)と言って、「空腹が満たされることだけが『救い』ではない。『救い』とは何より、神に受け入れられ、神との関係で生きることであり、人が神との関係で生きる時、生きるために必要な配慮は神がして下さるのだ、だから、私は人を神と結びつける救い主なのだ」と言って、悪魔の誘惑を退けられたのでした。

5〜6節に「すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。『あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。「神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる」と書いてありますから』」(5〜6)とあります。2つ目の誘惑です。「神殿の頂」というのは、エルサレムの神殿の最も高い所のこと—(崖下からは140mの高さにあった)—ですが、当時の人々の信仰によれば、救い主が神からこの世に遣わされた時、そこに姿を現すとされていた所でした。実際に悪魔がそこにイエス様を連れて行ったのではなく、イエス様の幻の中の出来事であったかも知れませんが、いずれにしても悪魔は、そこにイエス様を立たせて言うのです。「あなたは神の子であって、世を救うために来たのだろう。あの待ち構えている群衆に向かって、あなたが本当の救い主だということを納得させてみせなければいけないではないか。納得させる一番の近道は、あなたがここから飛び降りることだ。聖書にも書いてあるではないか。神を信じて疑わない人は、高い所から飛び降りるようなことをしても、神の命令によって御使い達がさっと集まって来て、その人の足を地面に着かないうちに捕らえて支えて下さるはずだ。それが信仰者に与えられている約束だと、聖書に書いてあるではないか」。「詩篇91篇」の言葉を持って、サタンはイエス様を攻めて来ました。当時、自分を「メシア(救い主)だ/キリスト(救い主)だ」と自称する人がたくさんいたのです。その中で、人々はイエス様を簡単には信用しないという状況だったのでしょう。だから—(繰り返しというか、先ほどの続きになりますが)—悪魔は言うのです。「メシアたる者、そういう神の特別の守りの内にあることを民衆に証明して見せなければ、どうして人々があなたを『神の子だ』と言って信用するだろうか。しかし、ここに一度に民衆を信用させる方法があるではないか。ここから飛び降りてみなさい。そうしたら『この人

は凄い、この人の神は生きておられる』ということが人々にも分かるではないか」。

この誘惑は、説得力のあるものでした。イエスは「伝道の公生涯―{神を―(神の国を)―宣べ伝える公生涯)」に立たれるわけです。その時、人々にどう宣教して行くのか。途方にくれるような思いもあられたと思うのです。事実、この後、ある場所においては「人々がイエス様を全く信じない。そこでイエス様は何も出来なかった」ということもありました。自分の情けない例で恐縮ですが、随分前のことですが、どうやって外の方に教会に来て頂けば良いか分からなくなったような時、「私の体が講壇から天井まで浮いて昇って行ったら、いや天井を突き破って昇って行ったら、世間の評判になって、伝道がし易いのではないか」と、そんなバカなことをぼんやりと考えたことがありました。今は「特別の癒しの賜物があればな」と切実に願います。いずれにしても、悪魔の言う「てっとり早い道を選ぶことも必要ではないか」という問いを真剣に受け止めた時、それはイエス様にとっても、心揺さぶられる誘惑だったと思います。まして、皆が本当の救い主(メシア)を待っている。そういう人々の中にあって、人々の心を一遍に掴むことが出来るならば、宮の頂上から飛び降りることは、イエス様にとっては何でもないことだったと思います。

しかしイエスは、この2番目の誘いもはっきりと拒否されます。なぜ、拒否されたのか。イエスがその時に言われたのは「『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある」(7)という言葉でした。イエスは「あなたが言うことは、主なる神を試すことになるから拒否する」と言われたのです。その時、イエスが引用されたのは「申命記6章16節」の言葉です。「あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、主を試みてはならない」(申命記6:16)。「マサで試みたように」とは…。それも―(前回同様)―「出エジプト」の出来事です。イスラエルの民がエジプトを脱出して、シナイ半島を旅していた時、マサ(という場所)で飲み水がなくなりました。民は、水を求めてモーセに詰め寄ります。「私達に飲む水を下さい…いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのですか。私や、子どもたちや、家畜を、渇きで死なせるためですか」(同17:2～3)。そして彼らは「主は私たちの中におられるのか、おられないのか」(同 17:8)と叫んだのです。つまり「もし、主が私達の中におられるなら、私達を守って下さるのなら、水を与えてくれるはずではないか。水が与えられないのは、主が私達を守って下さるという約束が嘘だったのではいか。水も与えないような神が本当の神なのか。本当に神なら、水を出して見せてくれ」、そう言ってモーセに迫り、神を試したのです。その出来事を受けて「申命記」に「あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、主を試みてはならない」(申命記 6:16)と記されました。確かにイスラエルの民は「神など生きているかどうか分からないではないか」と言いたくなるところに居たのだと思います。その苦しみの中から出て来た呟き、叫びだったと思います。誰も責められないかも知れない。しかし「申命記」は「この民の行動は間違いだった。これは罪だった」と言うのです。そしてイエス様も、ここでそのことを繰り返されました。

それはどういうことなのか。イエス様は「神を試す、そして自分が納得したら『この神について行こう』と確認する。そういうところに真の意味において神との関係が成り立つのか。『救い』が成り立つのか」、そういうことを言っておられるのではないでしょうか。イエス様に関して言えば「私が身を投げて、父なる神が助けて下さるかどうか試してみて、その上で神を信頼するのではなくて、神が助けて下さろうが、そうでなかろうが、私は神を信頼する」と言われたのだと思います。イエスは、そういう形で父なる神との関係を持とうとされたのです。しかし、それはまた「イエス様と神様との関係」に留まらず、イエスが与えようとされる「救い―(教えようとする信仰)」がどういうものなのか、つまり、私達の信仰の在り方、「私達の救いとはどういうものか」、そこに関わって来るものなのです。

イエス様が不思議なことをして見せて、拍手喝さいで迎えられて、それで多くの人々の心を掴んで、人々にご自分のメッセージを聞かせて、それで救い主然としていられたら、その方がイエス様

には楽でいらしたはずです。しかしそれでは、私達の信仰はどうなるでしょうか。私達の信仰の生活で、イエス様が不思議なことをして下さる、困った時、「イエス様、あなたが神の子なら、私のこの状況から救い出すのが神の子ではないですか。神様、あなたが神であるなら、私の状況を変えて下さるのが神ではないですか」。そうして神を試して、そして神が不思議にして下されば、「神を信じて良かった」と思う信仰生活、そういうものが続いて行ったら、どうなるでしょうか。神が私の役に立つから信じる―(極端かも知れませんが)―そういう信仰になって行かないでしょうか。その信仰は「神が役に立たない」と思った時、耐えらない。簡単に捨ててしまうことにならないでしょうか。長年信仰生活をして来られたご高齢の方がおられました。ある日、地震が起こって、両隣の家の塀は崩れなかったのに、自分の家の塀は崩れてしまった。それで信仰を捨ててしまったというのです。これも極端な話ですが、こういう信仰は、本当に救われているということになるのでしょうか。本当に神様との関係を持っていると言えるのでしょうか。

私が最近、ひきつけられて読んだのは「百万人の福音」の中にあった宮本雅代という方の証しです。(読まれた方もいらっしゃると思いますが…)。私と同じ歳の方です。この方のご主人のことは、少し存じ上げていました。ご主人は20年前にALS(筋委縮性側索硬化症)を発病されたのです。(ご主人の信仰の証しの本も出ています)。その中で彼女は、ご主人のお世話をし、4人の子供さん方を育てて行かれました。ある時、ご次男が骨髄性白血病になられます。大変な苦しみでしょう。ご次男は骨髄移植で不通に日常生活を送れるようになられるのですが、そうしているうちに、ご長男とご長女が、いわゆるぐれてしまうのです。ご主人はこう書いておられます。「思春期の揺れは誰にでもあるのですが、揺れ具合が予想をはるかに超えていました。親が近づこうとしてもハリネズミのように針を立てます。毎週のように学校から呼び出され、対応に翻弄されている雅代を見ながら、父親として何ができるか毎日問い続けました」(宮本隆)。大変な状況でいらしたのだと思います。彼女は、信仰の戦いを経験されるのですが、「足跡(フットプリント)」の詩を通して、イエス様と一緒にそこを通って行くのです。彼女は言っています。「神さまはいつも私たちに『謙虚であれ』と教えてくれたではないか。神様の御姿を感じから、祈りを重ねて歩んで行きました」(宮本雅代)。彼女は神様と歩きました。やがて2人のお子さんも少しずつ落ち着いて行かれるのですが、本当に試練につぐ試練という感じです。ご主人は、後援会に呼ばれたりしておられたのですが、昨年、家族旅行の途中、体調を崩し、急遽自宅に帰った翌日、車椅子に座ったまま、突然死のような形で天に召されるのです。ご主人が最後に見つめておられたのは「キリストの愛が私たちを取り囲んでいる」(2コリント5:14)という銘板に刻まれた御言葉だったそうです。彼女は言っています。「それは『キリストの愛を信じて、神様の教えに向かって生きる』という夫婦の目標に通じる言葉だった」(宮本雅代)。そして、彼女は最後にこう結んでおられました。「私自身、今も悲しみは癒えていませんが、隆のメッセージをかみしめながら地上の平和を求めて歩み続けていきたいと思います」(宮本雅代)。

長く引用しましたが、本当に大変な人生です。しかし、神様が不思議なことをして下さらなければ倒れてしまう信仰ではないのです。その都度、神様と一緒に試練を乗り越えて行かれる信仰なのです。それこそ神様との真の関係を持っている信仰ではないでしょうか。そして、その時のポイントは「キリストの愛を信じて」ということです。つまり、私達の信仰を支えて行くのは、イエス様の愛なのです。

イエス様は、不思議なことをして見せて、人々の心を掴んで、それで救い主然としている救い主の道を取られなかったのです。そうではなく、私達が、罪を赦され、神様の御手の中に入り、どんな時にも神様に希望を見て生きて行けるように、そして、やがて死んでも天国に入って永遠のいのちを生きて行くことが出来るように、不思議なことをするのではない、十字架に架かって死んで下さることを選ばれたのです。私達を本当に愛するからです。私達が、本当に神様の御手の中で生き、

神様に抱かれて天国に入って行く道は、それしかなかったからです。

もちろん、神様は、私達の人生において不思議なことをして下さいます。恵み深い御業も見せて下さいます。ある方がしみじみと言われたことがあります。「神は凄いなー」。そうです。信仰生活は素晴らしいです。他の何も与えることが出来ない恵みの生活です。しかしそれは、不思議を次々に経験するからではない。私―(「私達」と言って良いでしょうか)―という取るに足りない存在が、神の御手に入り、天国に入って行くために、神の子が死んで下さった、それほど私達を愛して下さった。その愛の中で生きることが出来る生活だからです。そして、大切なことは、そこまで私達を愛して下さったイエス様を、神様を、何があっても心から信じることです。信頼することです。「神が神なら、こうして見せてみろ」ではなく、「神様、この状況の中で、私を持ち運んで下さい」と委ねて行く、恵みを信じて行くことです。その時に、道は開かれて行くのです。

まとめます。第２の誘惑の出来事を通してイエス様が示されること、それは、「『信仰とは、いつも私にとって都合の良い神、都合の良いしるしを見せてくれる神を信じること』ではない」ということです。イエス様は、そんな形で信仰を与えようとはされないのです。なぜなら、もしそうであれば―(繰り返しますが)―「どうして自分はこんな目にあうのか」と私達が問う時、その信仰は試練に耐えられないからです。また、不思議を為して下さるばかりの神様は、その時、私達に答えることが出来ないのです。私達の苦難の時、その神様は、私達の側に立つことは出来ないのです。でも私達の神様は、イエス様は、時に私達に都合の良い神ではないかも知れないけれど、私達がどんな状況に置かれても、私達を愛し、私達の傍らにいて下さり、深いところから確かに私達を支えることの出来る神様なのです。私達に与えられている信仰は、その神様、そのイエス様を信じる信仰なのです。時に「神のしるし」が見えない時もあるでしょう。弱い私達は、神様を疑いたくなるかも知れません。しかし私達は、神様が「都合の良い神」だから神様を信じ、神様を愛するのではない。神様が神だから、私達のために死んで下さった主だから、間違いなく世の終わりまで私達の神でいて下さる神だから、時に分からことがある時にも、この神様を信じ、神を愛し、神に仕える、そのような信仰でありたいと願います。